

ガザの奇跡

ろう学校の挑戦

損壊した家々、がれきの山。イスラエル軍の攻撃の傷跡が残る街で、2階建ての立派な校舎が存在を放つ。パレスチナ自治区ガザ市にある、アトファルナろう学校だ。「貧困が広がるガザで、この障害者教育の充実ぶりは、奇跡と見られています」。ナイム・カバジャ校長(46)が胸を張る。

学ぶのは4〜15歳の296人。子供6人に教師1人という少人数教育が特徴だ。教職員150人の半数以上は聴覚障害者。食糧難の中、給食を提供する。失業率は7割を超えるが、卒業生らのためクラフト製作などの働く場も設けている。

学校誕生は、NPO法人「パレスチナ子どものキャンペーン」(東京)の田中好子事務局長と同校のジェリー・シャワ前理事長が1990年にガザで出会ったのがきっかけだ。

募金活動が支え

ガザには聴覚障害者が多い。でも学校がなく、家に引きこもるしかない。2人は「ろう学校開設で意気投合した。田中さんは1千万円を集め、シャワさんは懸命に手話教師を育成。92年、民家



きずな

<上>

先生の手ぶりをまね、手話を勉強するアトファルナろう学校の1年生



道民支援 戦地に希望

支援を「訴えたことも。世界各地で援助を求め、寄付は今年、20カ国以上から1億円に達した。

「ハルミ、元気かい」「もちろん」。校内で、そんな会話が交わされる。ハルミとは、同キャンペーンのエルサレム駐在員

2月から学校運営を手伝っている。

昨年末から3週間続いたイスラエルの攻撃の爆風で、校舎の窓ガラス200枚以上が吹き飛ん



を借り、子供27人、教師8人で学校を始めた。しかし資金不足は否めない。2002年、田中さんの活動に賛同した札幌学院大の坪井主税教授(68)が手を差し伸べた。「北海道プロジェクト」の子供を見捨てないで。

「アトファルナ募金」を設立。同募金は毎年、自治労道本部の歳末募金の一部など150万〜200万円を寄付する。

シャワさんは03年、招待された道内で、「ガザ」のチャンピオンに就任。昨年

「窓ガラスを付けるため、今月から、『ガザ越冬のキャンペーン』を始める。道民のみならず、真とも担当し、3回連載(カイト・坂東和之が写真)します」

だ。寒風の中、ビニールを張ったままの校舎に心を痛める。

「窓ガラスを付けるため、今月から、『ガザ越冬のキャンペーン』を始める。道民のみならず、真とも担当し、3回連載(カイト・坂東和之が写真)します」

戦禍に苦しむガザ市のアトファルナろう学校で、障害を抱えた子供たちが必死に学んでいる。イスラエルの軍事攻撃の中、どのように苦境を乗り越え、自立しようとしているのか、道民らの支援はどのように生かされているのか、報告する。

「カイト・坂東和之が写真も担当し、3回連載(カイト・坂東和之が写真)します」

アトファルナろう学校 ガザ地区(人口約150万人)の中心都市であるガザ市(同約40万人)にある。ガザ地区初のろう学校で、幼稚園から中学までの11年制。アトファルナは、アラビア語で「われらの子」の意味。寄付で運営する私立校で、授業料や制服などすべて無料。同校によると、同地区の聴覚障害者は人口の1.5%推定で、通常の数倍という。

イスラエルとの軍事対立の中、妊婦が受けた精神的衝撃や、乳幼児医療の不備などの影響とされる。

ザと北海道の懸け橋として、支援に力が入る。

ガザの奇跡

ろう学校の挑戦

「生まれて初めて、音が聞こえた。死ぬかと思つた」。イスラエルによる空爆を体験したアトフアルナろう学校6年、タスニーン・アブヤタさん(12)は、音がまったく聞

ガザ大規模攻撃
イスラエル軍が昨年12月27日から3週間、行った空爆や地上侵襲。ガザを実効支配するイスラム原理主義組織ハマスによるロケット弾攻撃の阻止が理由。パレスチナ自治政府によると、13000人以上が死亡、約54000人が負傷した。家屋4000棟が全壊、1万7000棟が損壊。被害額は約19億ドル(1710億円)。

〈中〉

傷跡

話でそう話した。

同校の精神保健福祉士マリアン・カツシャンさん(30)が空爆直後の1月下旬、タスニーンさんと1年のアリ君(6)姉弟の安否確認のため、訪ねた時のことだ。「よほど強い振動が体に衝撃を与えたのか。それで音が聞こえたように感じたのだろう」と推測する。

飛行機におびえ

姉弟が住むのは学校が

らバスで15分ほど離れたパレスチナ自治区ガザ北部のジャバリヤ。1月17日に空爆で家は吹き飛んだ。一家8人は親類宅に避難して無事だった。

た。その空爆から、もうすぐ10カ月。家の跡地の仮設テント付近で遊ぶ姉弟を見ながら、父親のサードさん(37)は「2人ともだいたい元気になっ

た。でも、心の傷はまだ癒えないことつぶやいた。タスニーンさんはいまだに、飛行機が上空を通ると「また戦争が始まる」とおびえる。アリ君は、

手話で話しかけられてもまったく反応を示さないことがあるという。

的外傷後ストレス障害(PTSD)に悩まされているという。

空爆体感 後遺症今も

心のケアに重点

学校の福祉士の責任者

アビル・アルサツカさん(40)は「空爆の最中も終了後も、停電が続いた。耳の聞こえない子が夜は視界も奪われ、それが恐怖心を倍増させた」と分析する。

周囲の温かさに包まれながら今、子供たちは、明るさを取り戻しつつある。その一人、タスニーンさんは最近、夢を語るようになった。「一生懸命勉強して、この学校の先生になりたい」



心の傷を抱えるタスニーンさん(右)とアリ君の姉弟。空爆で全壊した家の跡には、援助団体から支給されたテントが張られている。

ガザの奇跡

ろう学校の挑戦

「来年、卒業したら、学校の工房で、織物職人として働きたい。一生懸命に練習しないとね」。

パレスチナ自治区ガザ市内のアトファルナろう学校の中学3年、ソヤフ・ボライム君(15)は、この秋から始まった職業訓練に余念がない。

学校の地下のクラフト工房では、在校生や卒業生が木工、手芸、織物などの作製に取り組んでいる。

イスラエルによる経済封鎖が続く、失業率70%超というガザ。クラフト工房は「卒業生らに仕事

を」と10年前に誕生した。スタッフ約50人の大半は聴覚障害者たちだ。

その1人で、聴覚障害のある木工指導員ハーシム・ガザールさん(44)は「過去に支援者の招きで訪れた北海道は、人や食べ物に素晴らしい。私にとっては故郷ガザが一番。ここで働けるのが最高さ」と話す。

運営資金手助け

工房で作られているのは、細かい彫りをあしらった家具、陶器に風景を描いた壁掛けなど100種類以上の製品。家具や

自立

<下>

ろう学校の卒業生らに木工を指導するハーシム・ガザールさん(左端)。面倒見がよく、仲間にも慕われている。



接注文が来るようになった。

人気商品は、丁寧に染色された、ラクダ形の木製キーホルダー(約千円)や、パレスチナ伝統の織物財布(1600円)。今では、年間売り上げが1千万円を超え、学校運営資金の1割以上を賄う。

「ラクダのキーホルダーは、日本でも大人気。どれも質が高く自信を持って販売している」。同校を支援するNPO法人「パレスチナ子どものキャンペーン」(東京)エルサレム駐在員の川越東弥さん(30)は「渡島管内七飯町出身」はそう説明する。

専門の高校必要

「ガザ支援に一番必要なものは」。その問いに、ナイム・カバジャ校

的に売り込んでいる。開校から17年。毎年の卒業生30人を全員就職させることは困難だが、今春、卒業生が運営するカフェテリアも校内に開設された。成人障害者や親子対象の手話教室を開講、テレビニュースの手話通訳も行う。アトファ

ルナは、厳しい経済・社会環境を克服し、聴覚障害者の活動拠点に育ち、「ガザの奇跡」と言われるようになった。

工芸品 世界から注文

陶器類は地元のみ販売だが、布製品や小物は、

4年前からインターネットを通じ、世界中から直

同キャンペーンは、道内外のイベント会場で積極

長(46)は「イスラエルに封鎖された『監獄』のよう

ガザ封鎖 2000年のパレスチナによる第2次インティファダ(反イスラエル闘争)後、イスラエルがガザへの人や物資の出入り制限を強化。07年にイスラム原理主義組織ハマスがガザを実効支配してからは、燃料や物資の搬入規制が強まり経済封鎖の状態に。人の出入りも、国連や援助団体関係者らに制限されている。昨年末から3週間続いたイスラエルの大規模攻撃後も、封鎖は継続。復興の障害になっている。

な状況から抜け出し、好きな場所で学んで働ける自由」と明確に答える。そしてその自由を夢見て、「ガザ初となる、聴覚障害者のための高校が絶対に必要だと力を入れている。アトファルナろう学校の挑戦は続く。(カイロ・坂東和之が担当しました)